

公 共 · 倫 理

問題 1 以下の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

人間は誰であっても単独では満足に暮らしていけず、だからこそ他者とともに社会を形成する。そこでは人びとの間で意見の対立や利害の不一致もとうぜん生じるが、それらを調整したり乗り越えたりといった形で社会は営まれていく。

独立した自由で平等な（ A ）という発想から出発しつつ、それら（ A ）を拘束する国家や政府といった政治権力の（ B ）を試みたのが、近代ヨーロッパにおいて何人もの思想家によって論じられた社会 説であった。『（ C ）』を著したホッブズ、『（ D ）』を著したロック、『社会 論』を著したルソーが代表的な思想家として挙げられている。もっとも、良く知られているように、これらの思想家の説く主張や理想はそれぞれ異なっている。

そうした思想家間の差異にかかわらず、国家や政府の意義は今なお否定すること^(a)
ができないものとなっている。^(b)しかしながら、経済や文化における 化が加速的に進んだ現代世界において、（ A ）の生活は自らの国家、政府の外からの影響を大きく受ける状況となっている。また、パレスチナ問題を筆頭に、（ E ）問題は今なお世界各地で生じているし、（ E ）や人種、宗教、政治的理由にもとづく迫害の恐れは、 となる人びとを多くもたらしめようという、国境を越えた重要課題となっている。そして、気候変動への対応や生物多^(c)
様性の保全といった地球環境に関する問題は、現今世代だけでなく将来世代の人びとの暮らしを決定的に左右するものともなっている。

これらはいずれも、それぞれの国家、政府単独ではおよそ満足のいく対応のできない な公共的問題であると理解できるだろう。社会 説を唱えた思想家たちが同時代の問題に応えようと試みたのと同じように、現代の問題に対^(d)
しては、今を生きる私たちこそが解決に向けた実践や思考を試みていかなければなら
ない。

問1 文中の（ A ）～（ E ）に当てはまる語句を以下の①～⑩の中から
選び、番号で答えなさい。

- ① 家族 ② 君主論 ③ 個人 ④ 諸国民の富（国富論）
⑤ 正当化 ⑥ 統治二論（市民政府二論） ⑦ 人間不平等起源論
⑧ 民族 ⑨ 無力化 ⑩ リバイアサン

問2 文中の ～ に当てはまる語句を答えなさい。

問3 文中下線部(a)について、それと関連する以下の①～⑥の説明のうち、不
適切なものを2つ選び、番号で答えなさい。

- ① 自然状態において人びとは平和的に共存できると考えたルソーは、自然的な人間の教育のあり方を説く『エミール』と、平和的な共存を訴える『永遠平和のために』を著した。
- ② 人民主権を擁護するルソーの議論は、間接民主制の批判であるとともに、直接民主制の主張につながった。
- ③ ホッブズは、自然状態において人びとが自由に振る舞うことで「万人の万人に対する闘争」状態に陥ると論じた。
- ④ ホッブズは、人びとが有するとされる自然権の国家（君主）への譲渡を主張し、結果的に絶対王政を擁護する形となった。
- ⑤ ロックの議論は王権神授説に支えられた絶対王政を批判するものであり、議会にもとづく間接民主制の定式化につながった。
- ⑥ ロックは、自然状態において人びとが有するとされる自然権を確実に守るために、人びとの抵抗（革命）権を否定した。

問4 文中下線部(b)について、それらの意義の重要な1つとみなされているのが社会保障制度の維持や構築である。そしてここでは、様々な物理的、精神的環境のバリアフリー化やユニバーサルデザインへの変更も進められてきている。このようにどのような人でも無理なく暮らせる社会を目指すべきだという発想は、と呼ばれている。このに当てはまる語句を答えなさい。

問5 文中下線部(c)について、こうした気候変動の枠組みや生物多様性については1992年にそれぞれの会議において具体的な取り組みの内容が採択されている。これらの例も含めた取り組みに対して、各国家は自らの合意によって拘束されるが、こうした国家間の合意をと呼ぶ。このに当てはまる語句を答えなさい。

問6 文中下線部(d)について、現在進行形でのそうした実践の1つと言えるのが、1992年に国連環境開発会議で掲げられ、その後、2015年に国連サミットにて世界的な目標として設定された「目標」である。このに当てはまる語句を答えなさい。

問題2 以下の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

西洋の哲学では古代ギリシア以来、主に私たち人間に対して自己を示してくるもの、すなわち は、それが真なる存在なのか (A) の存在に過ぎないのかという点を巡って激しい論争が繰り返されてきた。これについて、(B) 論を唱えたとされるプラトンは、(C) を通じて理性的思考の対象となる (B) とは異なり、(D) の対象に過ぎず、およそ真に存在するものではありえないと考えていた。

ずっと時代が下って近世・近代の経験論では、人間の (E) の中にある観念や (D) データを とみなし、それとは異なるかたちで存在するもの、すなわち 認識主体から独立したものなどないと唱えるものや、そのような ^(a) について例えばそれが生じた原因を語ったとしても真理の認識にはならないというように、認識の客観性を否定する懐疑論を唱えるものが登場した。この ^(b) ような立場に対抗してカントは、(D) 的に知覚可能な と私たち人間の (D) 的知覚に依存しない とを区別し、 については認識可能だと主張した。

と をまったくの別物と考えて は認識できないと考えるカントに対し、彼を乗り越えようとするドイツ観念論の哲学者たちは両者を ^(c) 何らかの仕方で結び付けて考えようとした。

19世紀後半から20世紀前半を生きたフッサールは、これまでさまざまな仕方で登場した 理解にはさまざまな先入見が入りこんでいると批判し、「 へ」というスローガンを掲げて を解明する 学を打ち立てた。例えば私たちはベッドで仰向けに寝そべって少し頭を上げて自分のつま先の方を見た時に見えるものを描く場合に、本当は見えているはずの自分の鼻先を抜かすことが多いだろう。眼鏡をかけているならフレームなどがぼんやり見えているはずだが、それを描くことはまずないだろう。こうしたことに無自覚な人間は、本当は (E) されているものを先入見で排除してなかったものにし、 についてこういうものだと決め付けて判断している。 ^(d) そういった態度を改めることが正しい 理解に至るための第一歩だとフッサールは説き、対

象へと向かう（ E ）の在り方を解明しようとした。

フッサールのこのような学問的方法を受け継いだハイデガーは、フッサールの解明しようとしたものを明らかにするために人間の実存を分析した。^(e)

問1 文中の（ A ）～（ E ）に当てはまる語を以下の①～⑩の中から選び、番号で答えなさい。

- ① アレテー ② 意識 ③ アイデア ④ 仮象 ⑤ 感覚
⑥ 情念 ⑦ 身体 ⑧ 想起 ⑨ ヒュレー ⑩ 論理

問2 文中の ～ に当てはまる語句を答えなさい。

問3 文中下線部(a)について、これに当てはまる人物を以下の①～④の中から選び、番号で答えなさい。

- ① バークリ ② ヒューム ③ ベーコン ④ ロック

問4 文中下線部(b)について、これに当てはまる人物を以下の①～④の中から選び、番号で答えなさい。

- ① バークリ ② ヒューム ③ ベーコン ④ ロック

問5 文中下線部(c)について、これに当てはまる人物を1人答えなさい。

問6 文中下線部(d)について、これに当てはまるものを以下の①～④の中から選び、番号で答えなさい。

- ① アタラクシア ② アパテイア ③ エポケー
④ テオ（一）リア

問7 文中下線部(e)について、ハイデガーがこのような目的でこのようなことを行ったのはなぜか、簡単に説明しなさい。

問題 3 以下の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

人間は生まれてきた以上、病み、老い、必ず死を迎えなければならない。さら
(a)に、憎いものと出会ったり求めるものが得られなかったりと、思いどおりになら
ないことで満ちている。このような人間が生きていくうえで避けることのできな
い苦の問題と向き合ったのが、紀元前5世紀にヒマラヤの麓で小部族の王子とし
て生まれたとされるガウタマ＝シッダッタである。(A) の地で悟りを開き、
真理に目覚めた者、すなわちブッダとなったガウタマは、最初の説法で4つの真
理を説いたとされる。1つ目は (B)、すなわちこの世の全ては苦であるとい
う真理、2つ目は (C)、すなわち苦の原因は煩惱であるという真理、3つ目は
(D)、すなわち苦は消すことができるのだという真理、4つ目は (E)、
すなわち苦を消すための正しい方法があるのだという真理である。

ガウタマ・ブッダによれば、この世のすべてのものは様々な原因や条件が寄り集
(b)まって生じており、無条件にそれ自体で存在するものはない。だが人間は、あらゆる
ものは絶えず変化してとどまることはないという や、独立した永遠不
変の実体は存在しないという といった真理を理解しないがゆえに、自己
(c)や自己の所有物が自分の思うままになったり永遠に存在し続けたりすると思ひ込ん
で執着する。しかし物事をありのままに見ることができるようになれば、煩惱から
解放され、安らぎの境地である (F) に至ることができるのである。人間はこ
の理想の状態を目指して修行をするのであるが、それは快樂主義に偏ったものでも
苦行主義に偏ったものでもなく、(G) を行くものでなければならない。具体
的には、8つの正しい方法に則って修行をするならば、出自や職業に関わりなく、
(d)誰でも (F) に到達することができるとされる。また、自己への執着を捨てる
ことは、自分以外の存在に対して目が開かれることでもある。人間はもちろん、生
きとし生けるもの全てである (H) は苦の中であえいでいる。修行者にとって
そのような全ての生の苦はもはや他人事ではない。それらを憐れみ、苦を取り除い
て楽を与えようとするのが (I) であり、万物の本質を見通す智慧と共にガ
ウタマ・ブッダの思想の根幹を成している。彼の教えはのちに弟子たちの手によ
って (J) をはじめとする様々な教典にまとめられ、現在に至るまで大きな影響
を与えている。

問1 文中の（ A ）～（ J ）に当てはまる語句を以下の①～⑫の中から
選び、番号で答えなさい。

- ① 一切衆生 ② ウパニシャッド ③ 苦諦^{くたい} ④ コルカタ
⑤ 慈悲 ⑥ スッタニパータ ⑦ 集諦^{じったい} ⑧ 中道
⑨ 道諦^{どうたい} ⑩ 涅槃^{ねはん} ⑪ ブッダガヤ ⑫ 滅諦^{めったい}

問2 文中の と に当てはまる語句を答えなさい。

問3 文中下線部(a)について、これらの人間の必然的な定めを仏教では何と呼ぶ
か、答えなさい。

問4 文中下線部(b)について、このような考えを何と呼ぶか、答えなさい。

問5 文中下線部(c)について、このような執着を何と呼ぶか、答えなさい。

問6 文中下線部(d)について、この内容として正しいものを以下の①～⑤の中
から1つ選び、記号で答えなさい。

- ① 瞑想は苦行の一つであるため、正しい精神統一の方法である「正定」^{しょうじょう}に
は組み込まれていない。
- ② 人間はそれぞれに異なった使命を帯びているということを知り、自らの果
たすべき役割を正しく自覚することが「正命」^{しょうみょう}である。
- ③ けがれを避けて身を慎むことが「正精進」^{しょうしょうじん}であり、肉などの動物性食品
を避けて植物性食品のみを食べて生活することがその正しい在り方である。
- ④ 嘘をつかないことは正しい言葉を語る「正語」^{しょうご}のひとつであり、いわゆる
「五戒」の中にも守るべき戒律として挙げられている。
- ⑤ 「正念」^{しょうねん}とはガウタマが弟子たちに教えた正しい念仏を唱えることであ
り、人間はそれによって極楽浄土へ行くことができる。